

## 国際シンポジウム「間宮林蔵が見た世界」

中村和之

2009（平成 21）年は、間宮林蔵がアムール川下流域を踏査し、デレンの満洲仮府で 3 人の清朝の官吏と名刺を交換してから 200 年目にあたる。旅行の後、間宮林蔵は村上貞助の援助を得て報告書を作成した。それが『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』の 2 冊で、サハリン島やアムール川の下流域に居住する先住民族の文化を研究する上で貴重な文献となっている。中村を中心とした「間宮林蔵の大陸の旅 200 年」実行委員会は、函館市と稚内市で国際シンポジウム「間宮林蔵が見た世界」を開催した。

間宮林蔵といえば、間宮海峡の発見者、あるいは偉大な北方探検家というイメージが強いのだが、彼は人跡未踏の土地を歩いたわけではない。間宮林蔵のデレンへの旅は、サハリン島のノテトという集落のニヅフの首長がデレンまで朝貢に行くのに同行したのである。またデレンの「満洲仮府」で間宮林蔵が見たのは、北方の先住民が清朝の役人に黒テンの毛皮を朝貢する姿であり、また先住民の間の活発な交易のありさまであった。

函館市で開催したシンポジウムでは、清朝のアムール川流域・サハリン島支配についての専著のある松浦茂氏を基調講演に招いた。松浦氏は、1980 年代から満洲語史料を用いて清朝の辺民支配の実情を明らかにしてきた。また大塚和義氏は、間宮林蔵の辿った道を実際に踏査して、清朝の朝貢交易にかかわる多くの資料を発見し紹介している。タチャーナ=ローン氏は、ウイラタ民族をはじめとするサハリン島の先住民族の研究者として著名な研究者である。

一方、稚内市のシンポジウムでは、アイヌ文化の研究者として著名な佐々木利和氏を基調講演にお願いした。佐々木（利）氏は、琉球の物質文化にも造詣が深く、広い視野からアイヌ文化についての研究を進めている。また佐々木史郎氏は、サンタン交易の研究で知られる方だが、数年前に間宮林蔵が行ったデレンではないかと思われる場所を発見した。今回、佐々木（史）氏には、そのデレンについてのお話しをお願いした。

以下が、両シンポジウムの内容である。

### 1. 国際シンポジウム「間宮林蔵が見た世界—デレン・サンタン人・石碑」

開催日：2009 年 8 月 30 日（日）

開催場所：函館市中央図書館 視聴覚ホール

主催：「間宮林蔵の大陸の旅 200 年」実行委員会

共催：函館市中央図書館

後援：函館工業高等専門学校・北海道民族学会・函館市教育委員会

基調講演：松浦 茂（京都大学） 「19 世紀初頭江戸幕府の北方調査」

報告：大塚和義（大阪学院大学）

「間宮林蔵『東韃地方紀行』の道をたどる」

タチャーナ=ローン（サハリン州郷土誌博物館）

「サハリン—間宮林蔵の探検から 200 年—」

中村 和之（函館工業高等専門学校）

「1809 年 9 月 5 日に間宮林蔵は何を見たか？」

総合討論：司会 小川 正樹（函館ラ・サール高等学校）  
 通訳 垣内 あと

## 2. 国際シンポジウム「間宮林蔵が見た世界—サハリン島・デレン・石碑」

開催日：2009年9月5日（土）

開催場所：稚内総合文化センター 小ホール

主催：稚内市・「間宮林蔵の大陸の旅 200年」実行委員会

後援：北海道民族学会・函館工業高等専門学校

基調講演：佐々木利和（国立民族学博物館）「間宮林蔵のみたカラフト」

報告：佐々木史郎（国立民族学博物館）

「デレンを探して—間宮林蔵はどこまで行ったのか？—」

タチャーナ=ローン（サハリン州郷土誌博物館）

「サハリン—間宮林蔵の探検から 200年—」

中村 和之（函館工業高等専門学校）

「1809年9月5日に間宮林蔵は何を見たか？」

総合討論：司会 内山 真澄（稚内市観光交流課）・千田 周二（北海道稚内高等学校）

通訳 中川 善博（稚内市建設産業部）

それでは以下に、両シンポジウムの基調講演の内容を簡単に紹介する。

### 1) 松浦 茂「19世紀初頭江戸幕府の北方調査」

間宮林蔵の『北夷分界余話』と『東韃地方紀行』、松田伝十郎の『北夷談』は、中国の史料にはない記述があり、貴重な記録である。これまでの研究は、松田・間宮の調査を地理学と民族学の視点から高く評価してきたが、彼らの調査を政治的な観点から考察することはほとんどなかった。

清はアムール川下流地方と樺太に辺民という組織を置き、ハライダ・ガシャンイダ・デオテジュセ・バイニヤルマの4つの階層に編成した。1689年、ネルチンスク条約によってアムール川流域は清

の領土となった。翌1690年、清はアムール川流域に国境調査隊を派遣したが、その時調査隊の一部が樺太北部に渡り住民53戸を辺民に組織した。これが清の史料に樺太が出てくる最初である。それ以降、清は毎年のようにサハリンへ兵を送ったが、その活動範囲は北部の平原地帯に限られていた。その後清は樺太の中部と南部に進出したが、そのきっかけは1727年のロシアと清との国境交渉であった。清は樺太の領有を確実にするため、1729年にイブゲネらを樺太に派遣した。イブゲネらはタライカまで達して、シサンの鎧・刀・漆器を持ち帰った。シ



函館会場

サンとはアイヌ語のシサムを起源とすることばで、北海道、あるいは日本を意味するが、この当時はまだ、清はシサンという国がどこなのかを知らなかった。1732 年にもイブゲネらは樺太に遠征し住民を辺民に編成した。これらの辺民のなかには樺太北部のニヅフ、南部の西海岸のナヨロ、東海岸のタライカ・コタンケシなどに居住するアイヌも含まれている。このように清は樺太南部にまで進出したが、清の進出はここで止まってしまい、清の勢力が樺太全土に及ぶことはなかった。

清は、アムール川下流域・樺太を特別な地域として一般人の立ち入りを禁止する一方、この地域の 2398 戸を辺民に組織した。辺民は 1 戸ごとに黒テンの毛皮を毎年 1 枚ずつ献上する見返りに、絹・木綿・針・櫛などが与えられた。1742 年の樺太の辺民は 416 戸にのぼったが、その約 80%は北部の人たち、残りが中・南部のアイヌだったと推定される。はじめは清の支配は安定しているように思われた。ところが、1742 年のキジ事件という殺人事件をきっかけに、樺太東海岸のアイヌは清から離反してしまった。また清も、アイヌの離反を食い止めることはしなかった。そのため日本の進出が本格化する 18 世紀末には、清は樺太から撤退しており、日本人が清の勢力と直接に接触することはなかった。ただ樺太住民のなかには清が置いた辺民組織が残されており、辺民の地位を世襲する人たちがいた。

18 世紀までの日本人による樺太の調査には、共通する特徴がある。まず、誰一人として樺太の北部に達した者がいないということである。1785 年の庵原弥六・大石逸平から 1792 年の最上徳内・和田兵太夫・小林源之助らまでの調査隊は、清の支配する地域に部分的に足を踏み入れただけで、樺太南部に住むアイヌと交易に訪れる山丹商人については記しているものの、樺太北部に誰が住むのかという記述はない。もうひとつは、彼らが誰一人、清がアイヌを辺民に組織していたことに気づけなかったことである。1801 年の高橋次太夫・中村小市郎の調査は、松田・間宮の調査に先行する予備的な調査と位置づけることができる。中村小市郎は『唐太雑記』を著し、樺太の政治状況や民族について記録している。高橋・中村は、山丹との境界まで到達することはできなかったが、ウイльтаなどサハリン北部の住民や山丹商人について、これまでよりは格段に正確な記述を残した。しかし高橋・中村も、清が樺太の大部分を実効支配していたことには気づけなかった。

松田・間宮は、1808 年の調査の結果、樺太が離島であることを確信した。また、樺太の大部分が外部勢力の支配化にあり、ハライダ・ガシャンイダなどの辺民の職を貰っていることを発見した。しかし、この段階では外部勢力が何者であるのかは明らかではなかった。この外部勢力が清であることを明らかにしたのは、1809 年の間宮林蔵の調査である。間宮は、トジンガの満洲仮府でトジンガ・ボルフンガ・フェルヘンゲという 3 人の清の官吏と会った。間宮は、トジンガらから貰った名刺の文字から、彼らが清の官吏であることを知った。また間宮は、デレンで行われているのは貢納を行う政治的な儀式であり、単なる経済的行為ではないことに気づくとともに、辺民組織が、清がアムール川下流域・樺太に統一的に設けた行政組織であることを理解した。樺太を含むアムール川下流域の政治情勢を正確に理解できた日本人は、間宮林蔵が最初であった。

一方松田は、樺太南部のアイヌの借財の整理に取り組んだ。山丹商人は、前借り・前貸しという独特の取引方法で樺太の現地住民を支配するようになり、各地で紛争を起こした。松田は 1809 年にクシュンコタンに到着すると、アイヌが自力で返済できる負債は返済させ、残りは幕府が肩代わりすることとした。さらに、アイヌが山丹商人と財貨を貸借することを禁止し、山丹商人から購入した品物を献上することも禁止した。この松田の行動は、幕府の方針である、

樺太の内国化とアイヌ撫育策を実現するものであったが、その際、幕府が救済しようとしたのは、それまで松前藩に従っていたアイヌであった。

1809年、幕府は樺太の名を北蝦夷地に改めた。これにより樺太南端部の内国化が完成した。松田・間宮の調査によって、江戸幕府は清がその直前まで樺太の大部分を支配していたことを知った。この報告がもとになって、江戸幕府は樺太に対する具体的な方針を打ち出した。このことこそが、松田・間宮の調査が日本近世史のなかで占める重大な意味である。

## 2) 佐々木利和「間宮林蔵のみたカラフト」

先の函館市のシンポジウムにおいて、大塚和義氏が所蔵される史料が紹介された。大塚氏は、銚先の細かい描写に注目し、この史料を間宮林蔵がアムール川下流域・樺太での調査の際に記した野帳ではないかとしている。この発見は驚くべきものである。間宮林蔵の野帳は知られておらず、松浦武四郎とは大きく異なっている。ただ、間宮林蔵の自筆と確定できる筆跡は、手紙が何通かしか残っていない。手紙と野帳とでは、筆跡が異なる可能性もある。



稚内会場

間宮林蔵は、村上貞助と一緒に『北夷分界余話』・『東韃地方紀行』を編さんした。これは、幕府に献上した言わば正式報告書である。この一連の旅で、林蔵は何をどう見てきたのだろうか。間宮林蔵は、文化5(1808)年に白茅から東海岸を踏査した。西海岸を北上した松田伝十郎とはノテで落ち合い、翌年には単身で東韃地方に渡った。『北夷分界余話』・『東韃地方紀行』の絵は、村上貞助が描いたものである。幕府に献上した「北蝦夷地図」を見ても、林蔵が細かいメモを取ったことが想定される。貞助はアイヌ以外の人びとを見ていないから、ニヴフの魚皮衣や帯、船などの細かな描き方は、林蔵のメモなしには描けなかったといえる。『北夷分界余話』の初稿本の絵を調べると、幕府に上程した本とは絵の違うものがある。上呈する時に絵を変えた理由は不明である。また、林蔵の記録にしか残されていない習俗もある。『北夷分界余話』の「女夷洗屍」は、アイヌの長の死体を毎日洗う、アイヌの葬礼を描いた唯一の例である。

間宮林蔵は、調査のなかでアイヌ・ニヴフ・ウイルタ・山丹の人びとを描いているが、彼の本来の目的は何だったのか。それは、やはり地図を作るためではなかったかと考えられる。林蔵の樺太地図にはひとつの特徴がある。それは、緯度の測定が正確にできていないということである。文化6(1809)年に樺太から帰ってきた時点の地図には、緯度に2度ほどの狂いがある。方位については、樺太に行く前に伊能忠敬から特製の椀化羅針わんかを貰ったために正確に測定できたが、緯度には問題があった。

林蔵は、伊能忠敬と同じく歩測で長さを出しているが、方角が正しく出ないと正しい地図ができない。そのため、林蔵の測量では山の存在が重要になる。これは伊能忠敬も同じである。伊能忠敬の地図作りは、針突法という方法を用いている。この方法で作られた地図を観察すると、紙に針で穴を空けている。これが測点である。測点と測点の間は、直線で結ばれている。

間宮林蔵は、伊能忠敬に私淑した人物だが、不思議なことに林蔵の自筆の地図といわれる地図は、伊能忠敬の針突法が用いられていない。一方、幕府に献上した地図は針突法が用いられている。その理由は不明である。現在ライデン大学に所蔵される樺太地図は、最上徳内がシーボルトに与えたものである。この地図は林蔵が最初に書きあげた樺太地図の可能性はあるが、針突法で描かれたものであるかどうかは未確認である。

伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」の蝦夷地の北方と内陸部は、間宮林蔵が測量したものである。これは伊能忠敬が林蔵の測量を高く評価していた証拠である。だがこの地図には、国後までは載っているが、樺太が載っていない。これはなぜだろうか。「大日本沿海輿地全図」は、伊能忠敬の生前には完成せず、文化 15（1818）年の伊能忠敬の死後も編集が進められた。伊能忠敬の死後、文政 4（1821）年の「大日本沿海輿地全図」の完成まで、地図の作成を指導していたのは、高橋景保であった。あるいは、高橋景保が自身による世界地図の作成との関係で、「大日本沿海輿地全図」に樺太を載せなかったのかもしれない。シーボルト事件のきっかけは間宮林蔵であったとされるが、林蔵は幕吏としては優秀で、また優れた測量士でもあった。現在、伊能家に残されている蝦夷地の地図の下図を精査すると、林蔵の測量の方法と技術を明らかにできるかもしれない。さらに、林蔵の野帳を復元できる可能性もある。

間宮林蔵の弟子に、今井八九郎という松前藩士がいる。八九郎は、利尻島・礼文島などの地図を残しており、安政年間に樺太を測量した時には、間宮林蔵の養子である間宮孝順と行動を共にしている。林蔵や八九郎は、伊能忠敬の測量隊とは違い、すべて一人で測量をしなければならなかった。その際アイヌの人たちの助けがなければ、彼らの測量はできなかったであろう。

（なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校）